

第10回 土佐の皿鉢ゼミ開催

（対面とオンラインによるハイブリッド方式で開催）

教職実践高度化専攻（教職大学院）院生の実践研究発表「第10回土佐の皿鉢ゼミ」が、2023年2月11日（土）に、対面とオンライン（Web 会議システム Zoom による同期型オンライン）によるハイブリッド方式で開催され、101名（対面26名、オンライン75名）が参加されました。開会では中野俊幸専攻長より、閉会では藤中雄輔附属学校教育研究センター長から、「皿鉢ゼミ」が、高知県の教育課題解決に対する共同研究の場であること、またそれぞれの院生の研究が「土佐の皿鉢料理」のように多様な視点からクリティカルで建設的な研究討議に展開していくことへの期待について述べられました。また参加して下さった方々からも、本専攻で学ぶ院生の研究に対する様々な期待が多く寄せられました。ここでは、発表した院生から、それぞれの研究課題における成果と今後の課題について語ってもらいました。

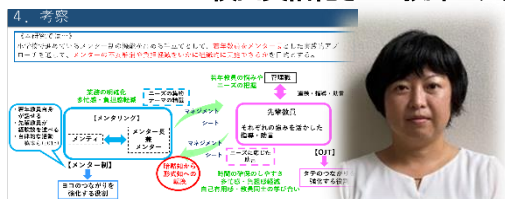
【学校運営コース】

M2 能勢朋典さん 業務改善と併せた組織における目標共有方策の形成—自律する学校組織の構築—

目標共有には、校長と教員間、教員間での立体的な相互理解と定期的な場の設定、運営組織などでの実践と目標との関係の視覚化・具体化が必要であり、そのために目標と活動の関係の検討・実施を促す仕組みが必要であることが確認されました。また、目標共有方策は、ICT活用により負担を増やさず実装できることも確認されました。



M2 横山美佑紀さん 教師の力量を高めるための小学校組織の在り方—効果的なメンター制の在り方を中心として—

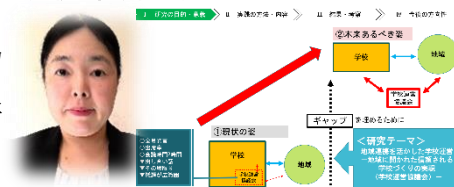


若年教員をメンター長とした実践を通して、メンターが抱える不安や負担を軽減しながら、若年教員のメンター長であってもメンターチームを運営する在り方を検討・実施しました。今後も、教師の力量を高めるためにメンター制の運用による学校組織の活性化について検証していきます。

【学校マネジメントコース】

M1 近藤史恵さん 地域連携を活かした学校運営—地域に開かれた信頼される学校づくりの実現(学校運営協議会)—

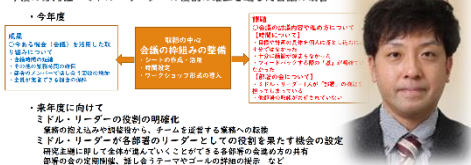
これまでの研究で現学校運営協議会の課題を明確にしました。今後、地教委の協力のもとに、学校・学校運営協議会委員・地域が互いに意思形成できる場となるよう、学校運営協議会の位置づけの整理や役割強化のための手立てを提案し実証研究を進めます。



M1 濱田幸伸さん 「令和の日本型学校教育」を実現するための「チームとしての学校」の在り方について

—働き方改革を視野に入れた業務改善とミドル・リーダーの役割—

今後の方向性 ミドル・リーダーの役割の確立を通じた会議の改善

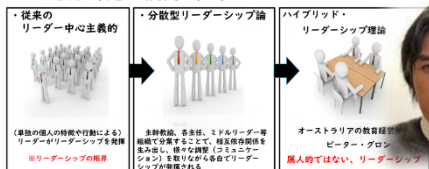


A 校で業務改善の機会として「会議」に焦点化し「生徒と向き合う時間の確保」、「目的の共有」について研究を進めました。成果として「会議時間の短縮」や「会議内容を効率よく共有する手立ての工夫」等、残る課題として「ミドル・リーダーのチーム運営における役割の共有」等を報告しました。

M1 松本 啓さん 自己指導能力を育むための校内支援体制の構築—セルフ・コンパッションに着目して—

セルフ・コンパッションの構成要素の1つであるマインドフルネスに着目した介入プログラム、「マインドフルネス瞑想」を実施しました。主観的健康感及びセルフ・コンパッションの向上が確認されたことから、マインドフルネス瞑想を含めた今後の取組を推奨したいと考えています。

先行研究の検討（1）リーダーシップ



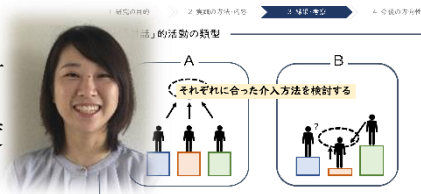
M1 山崎一平さん 組織的な学校運営への参画—ボトムアップの意識改革—

学校経営計画における記述の一貫性・全体共有の仕組み・取組との紐づけ・立案検証時期の見直しと、それに連動させたマネジメントカレンダーを作成することで、三部会が学校経営計画を意識した組織的な取組が実践でき、先生方の学校運営への参画意識も向上させることができました。



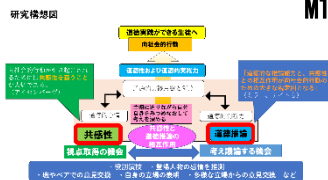
M1 杉本 瞳さん 国語科における学びの自覚を促す「対話」的活動の研究

今年度は、実践から仮説を立て、各タイプに応じた介入方法を検討しました。「対話」を活性化させ、深い学びにつなげるためには、「他者性」を確保することや「個」に還すこと、単元を貫く「問い」の設定などが重要であると考えられました。次年度も授業実践を通し、言葉への自覚を高める手立てを検証していきます。



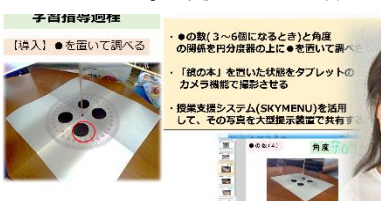
M1 中谷憲二さん 道徳実践力を育む道徳授業の在り方の研究—共感力の育成に焦点を当てて—

アイゼンバーグの向社会性理論をもとにして、道徳科の授業の中に視点取得の場面と考え議論する場面を設定して共感力の育成を促す道徳授業を実践しました。役割演技を通して共感力を育成しながら道徳的判断力を高めることにより向社会的行動をとろうとする意識が喚起されることが示唆されました。



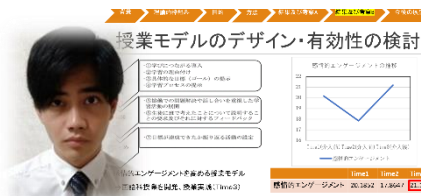
M1 柳花一輝さん 生徒のエンゲージメントを高める国語科授業の在り方について

国語科授業における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、エンゲージメントという概念に着目し、研究を進めています。1年次後期では、生徒の感情的エンゲージメントを高める授業モデルを作成し、有効性を確認することができました。今後はその授業モデルに基づき、実践検討を進めていきます。



M1 吉本果矢さん 思考ツールとして ICT 活用した算数科授業の研究

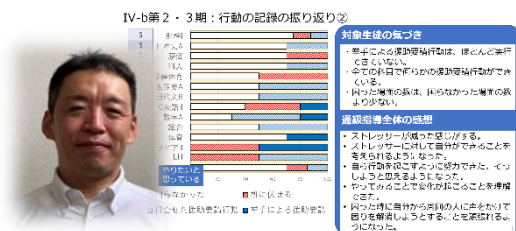
タブレットのカメラ機能を用いて、図形の性質を探究する活動を取り入れました。ICT を思考ツールとして活用した問題解決の授業が実現でき、ICT と具体物の併用は効果的であることが分かりました。2年次では、1年次での実践をブラッシュアップするとともに、新たな授業デザインを開発していきます。



【特別支援教育コース】

M2 大島励仁さん 高等学校における SST の実践的研究

高校生が授業内の困り場面で上手に対処できるように、機能的行動分析と認知行動療法を組み合わせた社会的スキル訓練を行いました。生徒の心理的变化を自覚的に捉えさせ、自己選択によって行動を促す指導を実践し、授業場面で機能する自発的な援助要請行動の獲得につなげました。



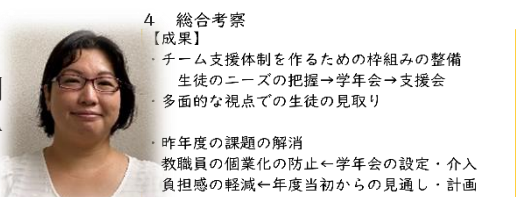
M2 楠瀬陽子さん LD-SKAIP によるアセスメントに基づいた読み書きが苦手な児童の支援

スクリーニングの結果見出された読み書きにつまずきのある児童に LD-SKAIP を実施し、その結果に基づいた指導を行いました。児童の文字習得が進み、各児童の学びやすい学習方法が見つかったことから、LD-SKAIP は支援法を検討するためのアセスメントツールとして有効であると考えられます。



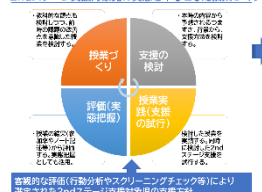
M2 古味 梢さん 特別な支援が必要な生徒に対するチーム支援

生徒の教育的ニーズを把握し、教職員におけるチーム支援体制を校内体制として整備構築する方法を明らかにすることを目的としました。支援のPDCAサイクルにおける check 機能を属人化しないシステムとして構築していくことによって教職員による支援の質が向上していくと考察しました。



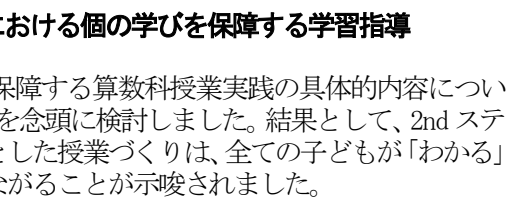
5. 総合考察

2ndステージ支援対象児童の実態を中心とした授業づくり



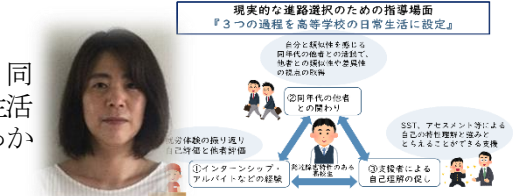
M2 廣瀬 空さん 小学校における個の学びを保障する学習指導

小学校における個の学びを保障する算数科授業実践の具体的内容について段階的支援や授業UDの視点を念頭に検討しました。結果として、2ndステージ支援対象児の実態を中心とした授業づくりは、全ての子どもが「わかる」「できる」授業の具体化につながることを示唆されました。



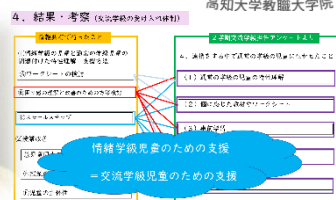
M1 柏木 妙さん 社会参加を見据えた自己理解と進路指導

多様な教育的ニーズがある生徒の社会参加に向けインターンシップ経験、同年代の他者との関わり、支援者による自己理解の促しの3つの過程を学校生活に設定し SST やソフトスキルチェック等を行った結果、自己理解の進むきかけは個々に違い、進路選択における個への指導の重要性が示唆されました。



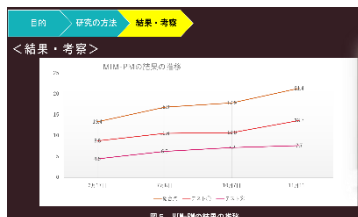
M1 高野 彩さん 困り感のある児童の支援体制づくり

自閉症・情緒障害特別支援学級（以下情緒学級）の児童が交流学級で共に学べるようにするため、交流学級の受け入れ体制づくり、情緒学級の自立活動の充実の視点から実践研究後、効果を検証しました。1 学級を対象とした実践から、来年度は学校全体の体制づくりを念頭に介入方法を検討したいです。



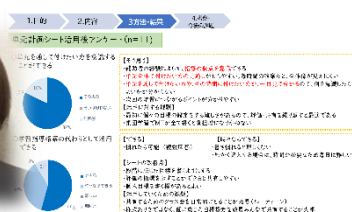
M1 西脇 高峰さん 小学校低学年の国語教育における支援の検討

日本語指導を念頭にMIM-PMによる児童の実態把握を行い、MIM指導や身体活動、ICTを活用したエクササイズを低学年の国語教育に活用しました。その結果、これらの支援は児童の学習に対する意欲向上につながりましたが、今後も継続的なMIM指導を中心とした支援の必要性が示唆されました。



M1 渡邊莉都さん 生きる力につながる知的障害教育における教科指導の在り方について

県立知的障害特別支援学校における教科指導の現状・課題の抽出と単元計画シートを活用した授業づくりへの参画を行いました。ツールを活用しながら、各教科等を学ぶ意義や各教科の「見方・考え方」についての理解を促し、効果的な授業づくりのできるシステムを検証していきます。



【各コース別・テーマ別協議内容】

【学校運営/学校マネジメントコース】「いかにチーム学校を創るのか」を協議の柱として、学校教育目標の位置づけや共有の在り方について、院生6名の研究を踏まえて意見交流を行いました。院生の発表において共通していたことは、個々の教員の当事者性、ベクトルを合わせて協働することができる組織についてでした。その後、フロアやオンライン参加者からの質問や、現場での事例紹介がなされました。抽象度が高いと自分事に引き付けられないので、少しチャンクダウンして、学級レベル、仕事レベルにまで砕いて共有していく重要性や、個々の教員にとって必然性のあるものにすることが大切ではないかといった意見が出され有意義な協議となりました。組織力を上げないと教育効果は上がりません。抽象度の高い学校教育目標をいかに具体的子どもの姿へと言語化していくのかという視点、またその目標が学校教育の日常に必要不可欠なものとなり、教職員を巻き込んでいくことのできる学校組織体制の再構築を進めていくという、「自律性」と「組織性」両面を向上させるアプローチの必要性について話し合われました。

【教育/授業実践コース】（教育/授業実践コース①）「学習意欲を高める授業づくり」について協議をしました。具体的な手立てとして「問題場面に生徒の実態を踏まえた身近な事例を用いる」「単元の導入で目指す姿を共有する」「授業終了の児童の振り返りから次時の問い（めあて）を見いだす」「発見のある活動を仕組み柔軟な発想を引き出す」等が挙げられました。それらをより効果的に実現するために、同僚と模擬授業を行う等、子どもの視点で思考を想定し、可能な限り子どもに寄り添った授業展開を目指すことが重要であることが共有できました。

（教育/授業実践コース②）「対話的な学びの実現に向けて」というテーマで、小学校算数・中学校国語・高等学校理科の立場から、それぞれの教科における対話について提案した後、フロアの方々と交えて「理想的な対話とは何か」「対話を生み出すために教師は具体的に何をすべきか」について協議しました。自己内対話が最終目標であることや、どの教科においても対話を生じさせるにはズレが必要であり、そのためには対話の根拠が何かを明らかにしたり、教科における見方・考え方を働かせたりすることが必要であるなど、学びの多い協議ができました。

【特別支援教育コース】『自立活動』の視点をもった連携の在り方として、全ての教員の自立活動の理解推進や特別支援学級・通級と通常の学級の連携について協議をしました。その中では、個別の指導計画の作成時から情報を共有したり、通常学級でできる支援の伝達など日常的な情報共有の場を確実に持つことが必要であるという意見が出されました。さらに、自立活動の視点の必要性を管理職から発信し、特別支援学級担任、通級指導担当教員、特別支援教育コーディネーター、通常の学級担任等が担う、それぞれの役割を明らかにし、全教員の意識を高めていける組織的な取組（校内支援体制づくり）の必要性も示唆されました。まとめとして自立活動の理解を促していくためには、自立活動を「苦手を減らす指導、得意を増やす指導」と捉え、子どもの「状態」の背景にある「理由」を考えていく、そして、それを一緒に考えることのできる同士、仲間を少しずつ増やしていくことが大切であるということを確認しました。

新型コロナウイルス感染症から季節性インフルエンザへの流行に替わり心配される頃でしたが、ハイブリッド形式での発表に、院生は各会場で直接多くの示唆を得られました。個々の院生の研究が積み重なり、高知県の教育課題解決につながる方向に大きく前進していることが確認されました。

次回の「第11回土佐の皿鉢ゼミ」は、2023年8月17日（木）開催予定です。

発行者：高知大学大学院教職実践高度化専攻長 中野俊幸

編集者：教職実践高度化専攻総務係・ニューズレター委員

発行日：2023年2月28日

事務局：教職実践高度化専攻附属学校教育研究センター

〒780-8520 高知県高知市曙町2-5-1（教職大学院係）

TEL 088-844-8457

E-mail ks33@kochi-u.ac.jp